上高井教育会報

第210号

発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会理事長　平林　博
編集人　会報編集委員長　市ノ瀬淳一
印刷所　須坂新聞社

自己研鑽で教育課題に対処する

上高井教育会理事長　平林　博

教育基本法の改正、学習指導要領の改訂、教員免許更新制度の実施、教員自己評価制度査定昇給制度、学校評議員会、学校運営協議会……。

いわゆる教育改革の名の下に、このところ怒濤のごとく変化の荒波が学校現場に押し寄せています。本来、教育は学校教育、社会教育、家庭教育で行われるはずなのに学校ばかりに教育の改革が要求されているような気がします。しかも、学校現場からかけ離れたところで学校教育のあり方が論議され実行に移されている感じすらします。

しかし、愚痴を言っても始まらないし、教職公務員として自らを律することが必要なこともまた厳然たる事実です。

ならば、現場の教員である私たちはこれらにどう対処したらよいのでしょうか。その答えは日々自己研鑽に努め、自身の教員としての資質を高めることしかありません。

「本会は会員相互の連携を保ち、その職能の向上を図り教育発展に貢献する。（定款第三条）同じ学校、同じ地域に勤務する教員同士が同僚性を発揮し連携して研鑽を図る。上高井教育会の存在意義がまさにここにあります。

（研究委員会）

教育会の活動の中核をなす研究委員会は、中心講師として益地先生をお招きして三年次になります。また、「教育課程研究協議会の研究とどう違いがあるのか？」という指摘に応えて、研究の進め方を大きく変更して二年次になります。すなわち、①各研究委員会の構成は会員の自主的な選択を第一にする。②授業者の決定を新年度に行う。③指導者は指導主事ではなく、郡内外の校長教頭などから人選する。④研究の進め方も授業校中心ではなく、研究委員会の推進委員、小委員で行う。

上高井の研究委員会は、郡全体があたかも一つの学校のように連携して研究に取り組むという点で他にはない特徴を持っています。郡市内のどの学校からも一五分ほどで集まることができる上高井だからこそ可能な研究体制を生かしたいものです。

（同好会）

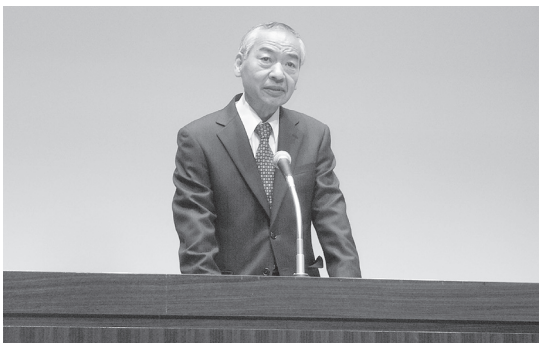
全員加入の研究委員会に比べ、ここ数年同好会への加入率が悪いことが反省点としてあげられています。同好会で行う教材研究や実技研修、隣地研修は、指導力を向上させるに有意義なものです。各同好会の運営にあたっては、会員以外の人も気軽に参加できる配慮をお願いいたします。

（不易流行）

上高井教育会では一九九五年、創立一〇〇周年を記念して芭蕉の「不易流行」の概念を上高井教育の象徴として選定しました。「不易」は普遍の真理、「流行」は、社会や状況の変化に従って変わっていくもの、あるいは変えなくてはならないものです。「不易」は「流行」の中にあり「流行」は「不易」を生み出す。この「不易流行」のシステムにより学問や文化が発展し、人間も「不易」と「流行」の狭間で成長していきます。

先に述べたように、社会の変化により、我々教員には実に多種多様の課題が課せられています。「不易」すなわち「普遍の真理」を知って基礎を確立し、「流行」すなわち「変化を知って新たな進展を諮る」という「不易流行」の概念を今まで以上に大切にして、これらの課題に対処していきたいものです。

（小山小）



上高井教育会総会　理事長挨拶より

教育会だより

4・1　選挙公示（役員選挙）
4・7　第1回代議員会　第3回選挙管理委員会
4・8　教育会役員選挙（正副理事長、理事、監事）
4・9　第4回選挙管理委員会
4・13　第1回理事会
4・14　平成20年度会計監査会
4・22　第2回代議員会（信教常任、代議員、補欠員、補充員の承認）
4・23　第5回選挙管理委員会
5・1　第2回理事会
5・8　研究委員長会
5・13　研究総委員会・同好会発足（於　須坂小）
5・14　研究委員会・同好会世話係・委員長・会長会
5・22　上高井教育研究集会三団体発足会
5・23　新任者歓迎教育懇談会（於　迎賓館）
研究推進委員会①
総会前日準備
教育会通常総会・講演会（於　須坂文化館）
○平成20年度会務報告並びに決算の承認
○平成21年度事業計画並びに予算の承認
○会員意見発表　上高井技術・家庭科教育研究委員会「澁谷和子（墨坂中）小林里美（相森中）」
表題「一人一人が自ら拓く技術家庭科の学習」
○講演　講師　益地憲一先生（関学院大教授）
演題「確かな学力を育む授業づくり」
～学習者の自己教育力を中心に～
5・30　第123回信濃教育会総会（中止）
6・3　第3回理事会
6・12　同好会②
6・11　第3回代議員会
6・16　研究推進委員会②
7・10　教育七団体結成会
7・11　同好会③
7・22　上高井教育会会報第二一〇号発行

「各委員会の主体的・創造的な取り組みを」

研究委員会会長　小山　修二

上高井教育会の研究委員会は、かつてA群・B群の二つがあり、A群は各教科、B群は課題別にと、全ての先生が両方に参加し年二回の授業研究を行っていました。私もその当時、その研究会に参加し、授業をやったり、参観させていただいたりして、教師としての力を育てていただいたことが思い出されます。その後教科別委員会一本に絞られて研究会がもたれ、それが脈脈と上高井の先生方の授業力向上の大きな流れとして続いてきています。

さて今年は「確かな学力を育む授業の創造」をテーマに掲げ、「関西学院大学教授」の益地憲一先生を中心講師として迎えての三年目となります。先日の教育会総会の講演で、益地先生から過去二年間の指導内容を踏まえ、授業成立の要素として「教師・学習材（教材）・学習者」の三点を挙げ、その中で「学習者の自己教育力」を中心に、確かな学力を育む授業作りと自己教育力についてのお話がありました。

私たちは三年目のひとつの区切りとして、益地先生のおっしゃる授業の目的は「確かな学力を身に付けさせる」ことであり、「自ら学び続け、主体的に社会生活を送ることのできる者を育成する場」とし、そのための授業改善の方向を「確かな学力の付く授業」の視点から、教師本位の授業から学習者の主体的な学びと学び合いになっているかを具体的な授業実践の中で厳しく問い直していくことが必要であると思います。

新指導要領の移行期を迎えている今、各委員会の主体的で創造的な取り組みの中で、今教師として必要不可欠な力は何か、教科としての喫緊の課題は何か等を検討しつつ、各委員会では独自のテーマを設定し、今日的課題に鋭く切り込んでいってほしいと思います。

（東　中）

本校の中核活動

「心と体を育む潤身の森で」

―― 日滝小学校 ――

本校には、校地内に潤身（じゅんしん）の森という場所があり、子どもたちの大切な活動の場所となっている。潤身の森には、クヌギ、ナラ、カシワの木を中心に白樺やイチョウなどの木が多数ある。

潤身の言葉は、本校の前身である潤身学校からとっている。その意味は、大学伝六章の「徳潤身」つまり、徳を修めれば、自然にその人の身も立派になっていくという意である。本校は現在の場所に校舎が移転して来年は三十年の節目にもあたり、創立百三十五年を数える歴史がある。徳潤身の精神は、校舎が移転した今でも受け継がれている。

このような伝統の中で、子どもたちは毎日活発に活動している。日滝小の子どもたちは、外へ出ての活動が大好きで、この潤身の森も子どもたちが大好きな場所となっている。夏はクワガタやカブトムシがクヌギの木に集まり、それを求めて、朝や休み時間にたくさんの子どもたちが集まってくる。校地内でクワガタやカブトムシが捕まえられる魅力ある森なのである。

また、秋にはイチョウの木にたくさんの銀杏がなる。特別支援学級（潤組）の子どもたちがそれを集めて、参観日に販売して活動資金にあてている。森からの恵を大切にし、昨年は得られた資金で、クッキーを作って再び売るという販売活動の学習も行われ、活動を通して人と人との結びつき、優しさ、思いやり、自然の大切さなど、大きな経験を積み重ねることができている。

低学年のある学級では、朝の読書や読み聞かせを自然あふれるこの森を利用して行った。教室を離れて自然の中で静かに読み聞かせや読書をすると、鳥の声、風の音とともに物語の世界が広がり、教室とは違った別の穏やかな世界の中に溶け込んでいるようで、子どもたちの心に潤いを与えてくれているようである。

先日の土曜参観日のお昼には、お弁当を抱えた子どもたちが森にやってきて、木漏れ日がさす木の下に敷物を敷いて、みんなで楽しく関わりながら食べていた。暑い日差しがさしていても、この森やその周辺はひんやりと涼しく、心地よい風が吹いている。自然の持つ力に子どもたちは引きつけられて集まるのかもしれない。

多くの児童が関わるこの森は校舎移転の十年目を記念して、自然林を中心とした植樹計画から造られた。潤身の森は、まだ二十年の歴史であるが、徳潤身の精神をこれからも引き継いで、子どもたちの心と体に潤いを与えてくれる場となっていくだろう。

（柳澤　和彦）

今、教育に求められていること

同好会会長　原田　武夫

新学習指導要領への移行初年度が始まった。言語活動や理数教育の充実、授業時数の増加や外国語活動の導入等、新たな教育課程の下で出発する時を迎えている。

教育基本法に始まり、学校教育法、同施行規則等の改正を受けた新学指導要領をどうとらえ、どう実施していくかということが一人ひとりの教師に求められているのだ。

これらの背景には①国際的な要請としてピサ（ＰＩＳＡ）やティムズ（ＴＩＭＳＳ）調査等による学力調査が重みを増してきたこと②これからの社会が「知識基盤社会」であり、人間力に通じる「生きる力」を正しく認識し、知識基盤社会を生きるための資質・能力を、教育課程全体を通して身に付けることを求めていること等があげられる。

このような中で「信濃教育」においても「教職員の研修を主体的、実質的なものにすることによる同好会の育成、研修の視点を環境整備などまで広げることの必要性、さらに、産業界など学校関係以外との連携を強めること」などを提言している。

本同好会は「会員の同好のものが集まって、会員相互の資質の向上を図ることを目的とする」と謳っているが、今こそ会員相互の主体的、実質的な研修が求められているのではなかろうか。（栗ガ丘小）

「哲学のすすめ」

哲学同好会　北原　紀夫

本年度、哲学同好会は会員数十一名で発足しました。

会員の皆さんと共に「実践的・体験的に哲学を追求する」という熱い思いを持って盛り上げていきたいと思っています。

私たちの同好会では、「人は、如何に生きるべきか」というテーマを掲げ、臨床哲学の視座から研修を行っていく予定です。

去る六月二十日には、第一回の学習会を行いました。普願寺本堂において、「楽に生きる」と題し、副住職業田昭映先生より御法話をいただきました。あるがままに全てを受け入れる「無為自然」の生き方や、自然に任せて一切の計らいを捨てて生きる「天上大風」の人生観を示唆して頂きました。

法話後の懇親会では、他の生命をいただきながら生かされている自分を改めて省みつつ、北海道直送のラムを食しました。

業田先生を囲み、和やかな雰囲気の中で哲学・倫理・宗教について更に研修を深めることができました。これからの学習会でも、自己の内面を見つめ、心を鍛えられるような研修を行っていきたいと考えています。（栗ガ丘小）

本校の宝 54 高山中学校

学校教育目標「自ら学び 高みゆく」

本校の学校教育目標は、平成四年から六年まで当校の校長を務められた青木廣安先生により据えられました。

青木先生は、山梨県出身の俳人、飯田龍太の句

「春の鳶　寄り分かれては　高みつつ」に目をとめられました。青木先生は、この句の中の「高みつつ」を「高みゆく」に変え、「高みゆく」が教育の目指すところをすべて包含する言葉となるのではないかと考えられ、この言葉が高山村や本校にぴったり合うことや、その響きの良さにも価値を見出されて、学校教育目標に用いられました。

この「高みゆく」を生徒も職員も、学校生活のあらゆる場面で意識しながら活動しています。本年度の生徒会目標「ＨＥＲＯは『信頼』『挑戦』『笑顔』をキーワードとし、「高みゆく」心・行動を呼びかけたものになっています。また、教職員も一人ひとりが、授業や活動の中で生徒と真正面から向かい合い、より具体的な取り組みに努め、その実践を職員間で情報交換しながら互いにスキルアップしていく「高みゆく」存在になろうと努力しています。高山中学校の精神の支えともいう言葉が「高みゆく」なのです。

「高みゆく」という言葉は、平成五年度卒業記念の「カエデの杜」の築山の石に刻み込まれたりして、生徒にも親しまれています。また、玄関と校長室には青木先生が揮毫された額が飾られています。（池田　淑惠）

残された牛乳

高沢　恵

「先生、飲めない。」といってクラスの子が持ってくる牛乳。

寒い季節になると、おなかが痛くなるからと言っておさら牛乳が二本三本と余るようになる。

さて、この牛乳をどうしようか、ただ飲むにもそう飲めるものではない。しかし捨てるのはもったいない。そこから牛乳を使った料理が始まった。

まず、自分の好きなパスタに使うようになった。大好きなカルボナーラは牛乳をたっぷり使って浸すぐらいにした方がおいしい。生クリームなど少なめでも牛乳を4人前で2本も使うと、ニンニクの風味とブラックペパーと塩、ゆで卵の黄身だけで、そこらのレストランと渡り合える味ができると分かった。

次にはホワイトソース。このホワイトソースを使うとグラタンでもドリアでも牛乳の濃厚なこくが出て、市販のものよりかなりおいしい。最終的にホワイトソースを使ってクリームコロッケに挑戦したのだが、大きなコロッケを作ろうとするとどうしても衣が割れてしまい、油が汚れうまくいかない。

現在、生キャラメル。これはおいしい。学校へ持ってきては、ちょっとしたティータイムに、と楽しんでいる。

（日野小）

清涼談義

カット　仁礼小　倉石 弘樹

「輝く一瞬」を残す喜び

林　浩史

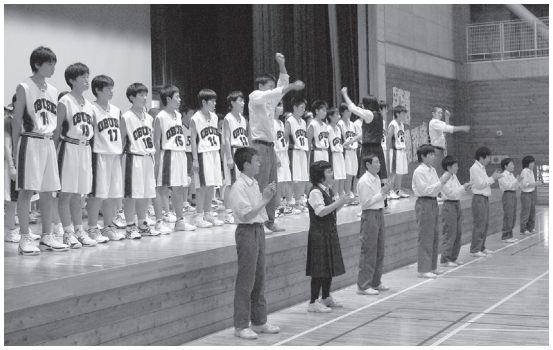
今年も運動部の大会の季節がやってきた。全校生徒で送り出す壮行会に何かサポートできないかと考え、昨年から生徒会の報道委員会で壮行ビデオを制作している。活動場所に出向き、練習風景と「がんばるぞ！おー」的なパフォーマンスを収録する。全員揃っているこの機会に、生徒会誌に載せる部ごとの集合写真と、卒業アルバムに載せる三年生の写真も撮っている。

五月下旬、報道委員会の正副委員長と一緒に、一週間かけて九つの運動部の活動場所を回った。どの部も大会前とあって、緊張感みなぎる練習でカメラを守るのに精一杯。パフォーマンスは伝統ある（？）部独自のものらしいが、なぜかカメラが回転させられる場面が多く苦労した。ユニフォーム姿の集合写真は壮観だ。生涯残る写真かも、ということで緊張するが、なんとか無事に全て撮り終えた。テロップで応援メッセージを入れ、盛り上がるBGMをつけて十一分のビデオが完成した。

六月初旬の壮行会。選手が入場し、ステージに上がったあとプロジェクターのスイッチが入る。食い入るように見つめる生徒たち。エンディングと同時に、期せずして拍手が起こった。

文化祭前には文化系部活の取材をする予定だ。

（小布施中）



編集後記

会報・第二一〇号を計画通り、皆様にお届け致します。

今年度も「会員が手にして読みたくなる会報」を目ざし、以下の改善を図りました。

（一）写真を多用し、大胆に構成変更し読み易くする。

（二）昨年度に引き続き、夏季号は「清涼談義」としました。

（三）原稿提出をメール送信のみとして迅速化を図る。

このような刷新にも関わらず、玉稿をお寄せ下さった皆様に心より感謝申し上げます。

出来映えはどうでしょうか。率直なご意見を、左記にお寄せ頂ければ幸いです。

委員長 市ノ瀬淳一（常盤中）
副委員長 齋藤　義男（栗ガ丘小）
委　員 松澤　裕子（小山小）
須加尾　隆（仁礼小）
栗林　孝成（豊丘小）
青木　典子（小布施中）
山﨑　祐子（高山中）
竹内　正（墨坂中）

平成21年度　県外視察者名簿（敬称略）上高井教育会

	学校名	氏名	視察目的	視察方面	実施時期
1	栗ガ丘小	青木さと子	思考力・表現力を伸ばす算数授業のあり方	筑波大附属小	8月
2	高山小	鈴木左代子	小学校(私立)における英語活動のあり方	東京	2学期
3	〃	久保田啓一	学校における人権同和教育をどう進めるか	三重県	11月28・29日
4	須坂小	小坂美千代	自然から学び科学的に考え知を更新する理科学習	東京	10月29・30日
5	小山小	横倉由紀子	楽しく学べる英語活動のカリキュラムと授業	新潟県	8月頃
6	森上小	佐藤加那子	発達障害の通級指導教室等の先進的な取り組み	関東・甲信越	8月
7	日滝小	宮嵜秀文	学習スキルを向上させるための学習指導	新潟大附属新潟小	未定
8	豊洲小	橋本　覚	楽しい体育の今後のあり方	東京	10月
9	井上小	田中敬士	子ども自らが学ぶ、授業のあり方	東京	10月
10	〃	杉山幹夫	特別な支援を必要とする子への対応	関東方面	11月
11	〃	伊藤ふき代	子どもの読書力を育てる学校図書館づくり	山形県鶴岡市	2学期
12	高甫小	藤澤真弓	研究に対する姿勢、学校体制	神奈川県浜之郷小	9月4日
13	〃	添谷里絵	視察校独自のカリキュラムや取り組み	京都立命館小	2月上旬
14	旭ヶ丘小	中澤雅子	日本吹奏楽指導者クリニック	静岡県浜松市	5月15~17日
15	仁礼小	遠藤和樹	理科学習における実感を伴う理解につながる授業	関東方面	10~11月(8月~10月)
16	小布施中	清水久明	適正な運動部活動のあり方	関東方面	12月
17	高山中	新井孝之	部活動の指導	関東方面	8月頃
18	常盤中	中島典明	職場体験を中心として、進路学習の進め方	東京方面	10月頃
19	相森中	西村千恵子	中学校英語教育のあり方	埼玉県所沢市	11月
20	墨坂中	島田雄太	発達障害と自立	新潟方面	8月~10月